日本グループ・ダイナミックス学会会報

ぐるだい JGDA ニュース

The Japanese Group Dynamics Association

http://www.groupdynamics.gr.jp/

第 50 号

（2016 年 12 月 27 日）

発行所： 〒464-8601　　名古屋市千種区不老町
名古屋大学教育発達科学研究科　心理社会行動科学講座
高井次郎研究室
日本グループ・ダイナミックス学会
E-mail：sec-general@groupdynamics.gr.jp
発行人：高井次郎　　編集担当：植村善太郎

【　目　次　】

§日本グループ・ダイナミックス学会第 63 回大会後記 ……2
◆ 大会準備委員長から：山口裕幸
§第 63 回大会参加記 ……3
◆ 王　瑋
§2015 年度優秀論文賞 ……4
◆ 選考経過と結果の報告：今川民雄
◆ 受賞者の声：山田順子
§2016 年度優秀学会発表賞 ……6
◆ 選考経過と結果の報告：有倉巳幸
◆ 受賞者の声：川本大史／宮島　健／徐　文臻／河村悠太
§国際学会大会参加記 ……12
◆ 河合直樹／乾　陽亮
§現場とグルダイ　教育界編 ……15
◆ 色褪せることのない研究：黒川雅幸
§事務局からのお知らせ ……16
◆ 研究の国際化支援制度（英文校閲補助）について
◆ 国際学会発表支援制度について
◆ 実験社会心理学研究　掲載予定論文
◆ 実験社会心理学研究の特集テーマ募集
◆ 次年度大会について
§グルダイ学会関係連絡先 ……17

★☆★　日本グループ・ダイナミックス学会第 63 回大会後記　★☆★

大会準備委員長　山口裕幸（九州大学）

バケツをひっくり返したという表現がピッタリ来るほどの激しい雷雨に見舞われた前日と打って変わって，大会初日 10 月 9 日の九州大学箱崎文系地区キャンパスは，すっきりとした青空が広がり，秋風が吹き抜けるさわやかな天候に恵まれました。遠く博多の地まで，会員の皆さんをはじめとして，研究発表に関心を持つ一般の方々まで，たくさんの方々にご参加いただき，皆様のご協力のお陰で，無事，本年度の学会大会を開くことができました。誠にありがとうございました。

冒頭に書きましたように，大会前日の天候はかなりの荒れ模様でした。大会前日とはいえ，常任理事会，理事会，機関誌編集委員会，優秀論文選考会議が開催されましたので，関係の先生方は，雨に濡れるなど大変な思いをされたことと存じます。学会運営へのご尽力に改めて深くお礼を申し上げます。

大会の方は，春先の熊本・大分を襲った大震災からの復興支援，あるいは防災・減災をめぐる取り組みをテーマとして取り上げたワークショップと研究発表が目立つ内容となりました。阪神・淡路大震災，中越大震災，東日本大震災を経て，地震はもちろん，様々な自然災害と人間社会がいかに向き合うのか，円熟味を増した議論が展開されました。また，他にも多様なテーマで研究発表が行われ，実り多い研究交流の場となりました。

我々準備委員会が企画したシンポジウムでは，南シナ海や尖閣諸島沖の領有権をめぐる国家間の軋轢や，ヨーロッパを揺るがす移民と宗教をめぐる紛争，アフリカ大陸を覆う民族間紛争など，世界中で拡大を見せる集団間紛争の抑制と解決の必要性をテーマに取り上げました。「グループ・ダイナミックスはいかに紛争や差別の理解と解決に貢献するか」というタイトルを掲げ，仲直りの文脈で進化心理学的アプローチを精力的に続けてきておられる大坪庸介先生（神戸大学），ヘイトスピーチをはじめとする日本国内での差別・偏見に関する社会心理学的研究で注目され活躍されている高史明先生(東京大学)，そして国連の政治局・安全保障理事会部で安保理を担当する国連職員として，安保理運営や地域紛争調停に関わって活躍されてきた川端清隆先生（福岡女学院大学）に話題提供していただき，フロアを交えた議論を行いました。グループ・ダイナミックスにとって永遠の研究課題といえるテーマですが，改めて問題を振り返る良い機会になったと思います。

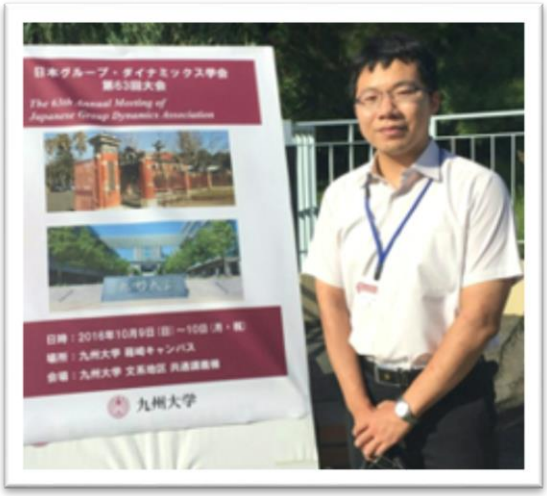
初日の夜の懇親会は，中洲の夜風に吹かれながら，夜景を楽しみつつ，グラスを傾け，語らいあう場となりました。オープンスペースの会場で，学会会場とは異なるくつろいだフレンドリーな雰囲気で楽しい交流が行われました。写真は懇親会のワンシーンです。

２日間の大会の期間中，限られた人員で運

営しましたので，不行き届きのことも多かったと思われますが，たくさんの方々にいたわりと感謝のお言葉をいただきました。準備と運営に際しては，前回開催校の奈良大学の西道実先生はじめ多くの先生方にご助力を仰ぎました。また，準備委員をお務めいただいた先生方のご尽力なくしては，とても無事に大会を終えることはできなかったと思います。ご協力いただいた全ての方々に，改めて深くお礼申し上げます。

★☆★　第 63 回大会参加記　★☆★

王　瑋（広島大学大学院総合科学研究科）



2016 年 10 月 9 日から 10 日にかけて開催されたグループ・ダイナミックス学会に参加しました。グルダイ学会に参加するのは 2 回目になります。2 年前，初めてグルダイ学会でポスター発表を行った時には，多くの方に発表を聞きに来ていただき，2 時間休まず発表したことを思い出しました。学会デビュー以来 2 年間，様々な学会で発表してきましたが，ポスター発表でも口頭発表でも，聞き手が少ないことは大変つらいことです。グルダイ学会は小規模な学会であるが故に，多くの参加者と密度の濃い議論ができるので，特に好きな学会です。

私は日本におけるワークストレスや長時間労働の生起過程及び抑制要因についての研究を続けており，今回は，労働時間やサービス残業時間に及ぼす部下同士の水平的管理と管理職によるリーダーシップの交互作用効果について発表しました。私は今回の研究で，たとえ管理職が倫理的リーダーシップを発揮していても，部下同士が仕事ぶりだけでなく私生活までお互いに監視し合うような職場では，かえって労働時間が長くなるという効果を明らかにしました。倫理的リーダーシップについて，これまでの研究ではポジティブな効果が注目されていましたが，今回このようなネガティブな側面を持つことが明らかになった点が個人的に面白い結果だと思います。また，いつもお世話になっている先生方や初対面の先生方にもたくさん来ていただき，様々な視点から貴重なご意見やご指摘を頂き，大変ありがたく存じます。

私は初日の夜の懇親会も参加しました。私はにぎやかな雰囲気が好きですが，見知らぬ人が多い場所では圧倒されてしまうところがあります。しかし，グルダイ学会は非常にアットホームな雰囲気で，知り合いの先生や普段お世話になっている先生など，多くの方とお話することができ，大変楽しい時間を過ごすことができました。また，懇親会後もラーメンに誘われて，引き続きおいしい料理を頂くとともに，貴重なお話を聞くことができました。

学会参加のもう一つの楽しみは，他の先生の研究を拝聴することです。ショート・スピー

チの産業・組織セッションや，「リーダーシップ研究の現在地とパースペクティブ」のシンポジウムを拝聴して，大変勉強になりました。全体的に発表者は少なかったものの，興味深い発表が多く，思い返すと 2 日間ずっと同じ部屋にいたことに気づきました。

最後に，大会運営にご尽力いただいた準備委員会の先生方，スタッフの皆さまに厚く御礼申し上げます。

★☆★　2015 年度優秀論文賞　★☆★

【　選考経過と結果の報告　】

機関誌編集担当常任理事　今川民雄（北星学園大学）

本年度の優秀論文賞の選考対象論文は，実験社会心理学研究第 55 巻 1 号及び 2 号に掲載された原著論文 8 本・資料論文 5 本の，計 13 編でした。55 巻 2 号の刊行が遅れたため，選考の手順が昨年より遅れてしまいましたことをお詫び申し上げます。9 月 6 日に編集委員全員に学会優秀論文賞選考のため，優秀と考えられる論文 3 編を選び，1 位から 3 位まで順位をつけて，9 月 30 日を締め切りとして投票をお願いしました。論文の著者となっている選考委員を除き，19 名の編集委員から投票が届きました。規程に従って，1 位票に 3 点，2 位票に 2 点，3 位票に 1 点を与えて集計しました。その結果を参考資料として，10 月 8 日に優秀論文賞選考委員会を開催して協議した結果，満場一致で下記の論文に，優秀論文賞を叙することに決定いたしました。

山田順子先生・鬼頭美江先生・結城雅樹先生
　友人・恋愛関係における関係流動性と親密性―日加比較による検討
　(第 55 巻 第 1 号　pp.18-27)

大会の総会において，この結果を報告し授賞式を行いました。受賞された先生方の研究の益々のご発展をお祈り申し上げます。

【　受賞者の声　】

山田順子・鬼頭美江・結城雅樹
友人・恋愛関係における関係流動性と親密性　―日加比較による検討
（第 55 巻第 1 号 pp.18-27.）

❀　**山田順子（北海道大学大学院文学研究科）**
鬼頭美江（北海道大学大学院文学研究科・日本学術振興会）
結城雅樹（北海道大学大学院文学研究科・北海道大学社会科学実験研究センター）

この度は，伝統ある日本グループ・ダイナミックス学会の優秀論文賞を賜りましたことに，心から感謝いたします。本論文を投稿させていただくにあたって，お忙しいなか貴重なコメントをいただきました査読者の先生方，ならびに，本論文をご推薦いただいた選考委員の先生方に，深くお礼を申し上げます。また，本論文を書き上げるにあたって，実験の計画から論文の執筆まで，根気強く丁寧なご指導をいただいた結城雅樹先生と鬼頭美江先生，そしてゼミやそれ以外の場で忌憚ないアドバイスをいただいた研究室の皆さまに，この場を借りて深くお礼を申し上げます。

本研究は，他者との心理的なつながりである親密性に及ぼす，社会生態学的環境の影響を検討したものです。従来，親密性は対人関係の良好さや維持に関わるものであり，社会普遍的に重要だとされてきました。しかし近年，実はそこには社会差があることが示されています。興味深いのは，他者との繋がりや調和の維持を重視するとされる相互協調的な東アジア人よりも，個人の目標達成や独立を重視するとされる相互独立的な北米人の方が，恋人や友人に対してより高い親密性を感じるという点です。本研究は，こうした社会差の原因を，当該社会の対人関係の選択の自由度，すなわち関係流動性に求めました。そして，対人関係が流動的で，対人関係が個人の自由な選択に基づく社会ほど，親密性が高くなることを示しました。この結果は，社会生態学的環境と親密性の関係を実証的に検討した新たな試みであり，対人関係において親密性が持つ機能的側面の考察や，社会環境の影響プロセスなど新たな検討課題にもつながっています。

この研究は，私が修士課程に入学してから初めて実施した実験に基づくものであり，同時に，初めて研究成果を論文として形にしたものとなります。当時は，初めて体系的に心理学実験を学び始めたばかりで，右も左もわからず，何から着手すればよいのかわからない状態でした。そんな中，指導教員である結城雅樹先生と，幸運にも同じ時期に北海道大学にいらっしゃった鬼頭美江先生のご指導の下，研究のいろはを教えていただいたのを思い出します。

初めての学術論文で，こうした素晴らしい賞を受賞させていただけたのは，ひとえに周囲の皆さまの温かなご指導とご支援のおかげだと改めて実感しております。それとともに，今回こうして受賞させていただいたことで，また次の論文を書かなければ，と身の引き締まる思いです。また，今回私たちの論文が受賞したことで，これから研究を始める，あるいは始めたばかりの若手の皆さまも，実直に積み重ねれば，いつか実を結ぶという自信を持っていただければ嬉しく思います。

改めまして，今回はこのような素晴らしい賞を賜りましたことを，重ねてお礼申し上げます。今回いただいた賞を励みにして，これに奢ることなく今後も精力的に研究を進めてまいります。**（執筆：山田順子）**

★☆★　2016 年度優秀学会発表賞　★☆★

【　選考経過と結果の報告　】

選考委員長　有倉巳幸（鹿児島大学）

2016 年 10 月 9 日から 10 日にかけて九州大学で開催された日本グループ・ダイナミックス学会第 63 回大会において，「2016 年度優秀学会発表賞」の選考が行われました。本賞は，規程により「第 1 著者である発表者が，発表時点において大学院在学中の者，または大学院修了後（退学後）5 年以内」の会員の研究を奨励する目的で設けられた賞です。

以下に，今回の選考経過の概略ならびに選考結果をご報告いたします。

１．エントリーの受付

エントリー受付は，大会発表申し込みの際になされました。エントリー総数は 31 件でした。受賞資格にあるかどうかを検討したうえで全て第 1 次審査の対象としました。

２．第 1 次審査

第 1 次審査は，常任理事及び理事により構成された 20 名の選考委員の投票により行われました。各選考委員は，8 月下旬から 9 月中旬にかけて，エントリーされた発表の論文集原稿を読み，各部門において授賞に相応しいと思われる発表 3 本以内（「該当なし」も含む）を選び，投票しました。なお，今回も，ロング･スピーチ及び English Session のエントリーがそれぞれ 3 件と 2 件でしたので，規定により第 1 次審査を行いませんでした。

集計の結果，ショート・スピーチ部門は，第 3 位が同点同位であったため上位 4 件が，ポスター部門は上位 3 件が選出され，全部門のエントリー合わせて計 12 件が，当日の第 2 次審査に進みました。

３．第 2 次審査

第 2 次審査は，第 1 次審査を通過した 12 件に対して，大会期間中に行われました。1 つの発表に対して 3 名の選考委員が，「発表内容」と「プレゼンテーション」のそれぞれを 5 段階で評価しました。

４．授賞対象発表の決定

最終集計は，第１次審査と第２次審査の結果を合わせて行いました。その結果，部門ごとに最高点を獲得した以下の発表における第１著者の方々が，発表賞を授与されることに決定しました（以下，敬称略）。

＜ロング・スピーチ部門＞

・第一発表者：川本 大史（日本学術振興会特別研究員，東京大学）
・発表題目：心身の冷たさを評価・制御・対処から捉える　－社会心理学・心理生理学アプローチ－
・共同発表者：浦 光博，吉本 廣雅，開 一夫

＜ショート・スピーチ部門＞

・第一発表者：宮島 健（九州大学）
・発表題目：評判維持戦略としての虚偽の罰行動(false enforcement)
・共同発表者：山口裕幸

＜English Session 部門＞

・第一発表者：Wenzhen Xu(Nagoya University)　＜徐 文臻（名古屋大学）＞
・発表題目：Relational intimacy levels and interpersonal communication styles compared across Japan and USA
・共同発表者：Reina Takamatsu, Chendong Ding, Syuji Uko, Anqi Hu, Jiro Takai
＜高松 礼奈，丁 陳棟，鵜子 修司，胡 安琪，高井 次郎＞

＜ポスター発表部門＞

・第一発表者：河村 悠太（京都大学，日本学術振興会）
・発表題目：「他者の目」が利他行動を促進するとき　－社会的規範の調整効果－
・共同発表者：楠見 孝

受賞者は，学会会長より賞状を授与されました。また，受賞した発表に関する論文を第１著者として『実験社会心理学研究』に優先的に投稿する権利を付与されました。この権利により，「特集論文」に準じて，主査および副査１名で審査を受けることができます。ただし，投稿の権利は，学会の広報（速報）メールマガジンである「グルダイメールマガジン(JGDA_Flash)」における受賞発表日（2016 年 11 月 1 日）から 1 年間に限って有効です。優先投稿を希望する受賞者は，その旨を明記の上，2017 年 10 月 31 日までに編集事務局へ原稿をお送りください。

【　受賞者の声　】

＜ロング・スピーチ部門＞
川本大史・浦 光博・吉本廣雅・開　一夫
心身の冷たさを評価・制御・対処から捉える
－社会心理学・心理生理学アプローチ－

❀ **川本大史（東京大学大学院総合文化研究科・日本学術振興会）**
浦　光博（追手門学院大学心理学部）
吉本廣雅（東京大学大学院総合文化研究科）
開　一夫（東京大学大学院総合文化研究科）

-32℃。私がこれまでで経験した中で最も寒い日の気温。その日は海外にいたので，知り合いも少なかった。気温以上の寒さを感じる気がした。

孤独や社会的排斥は「こころの冷たさ」として扱われることがあります。今回の発表では，孤独と冷たさとの関連を検討した 3 つの研究成果を報告しました。特に，冷たさを評価・制御・対処の観点から捉えることで，孤独感の高い個人が示す冷たさに対する特異的な反応を明らかにすることを目指しました。その結果，孤独感の高さは日常での冷たさ評価の高さと関連し，寒さと関連する写真（雪山など）を見た際の顔温度上昇（覚醒度や脅威反応を反映）を引き起こすことが明らかとなりました。一連の結果は，孤独感の高い個人は日常的に冷たさを感じやすく，冷たさに対して強い生理反応が生じることを示唆しています。

私が気温以上に寒さを感じたのは，気のせいだけではなかったのかもしれません。なぜ孤独感が主観的にも，身体的にも，温度に対する反応を変えるかについては，さらに検討が必要です。このような研究は，臨床（抑うつ）・発達（愛着）といった領域にも示唆があると思っています。特に，子供には必要以上の冷たさを感じないで欲しい。

本発表では多くの方にあたたかなご支援・励ましをいただきました。研究立案・サーモグラフィの技術的助言・実験実施にあたり，共同発表者の浦光博先生，吉本廣雅先生，開一夫先生にご協力をいただきました。入戸野宏先生，DeWall 先生は，私のプレゼンテーションの考え方を根本から変え，多くの素晴らしい発表を見る機会を提供してくださいました。スライドの画像と文字のバランスについて相馬敏彦先生から有益なアドバイスをいただきました。皆様のおかげで受賞することができました。ここに感謝の意を表します。

研究や論文執筆は孤独感を覚えることも多いので，このような栄誉ある賞を受賞でき励みになります。お忙しい中，抄録を読み発表を聞いていただいた審査員の方々にも感謝いた

します。今後も聴衆や読者が分かりやすい・興味を惹かれる・こころに残る発表や研究ができるよう精進します。

寒さを感じる季節になってきました。身もこころもあたたかく過ごしていただければ幸いです。Warmest regards.（**執筆：川本大史**）

＜ショート・スピーチ部門＞
宮島　健・山口裕幸
評判維持戦略としての虚偽の罰行動(false enforcement)

❀　**宮島　健（九州大学大学院人間環境学府）**
山口裕幸（九州大学大学院人間環境学研究員）

このたびは，名誉ある賞をいただき誠に光栄に思います。お忙しいところ選考くださいました先生方や研究発表に対して貴重なご意見を下さった先生方に感謝を申し上げます。

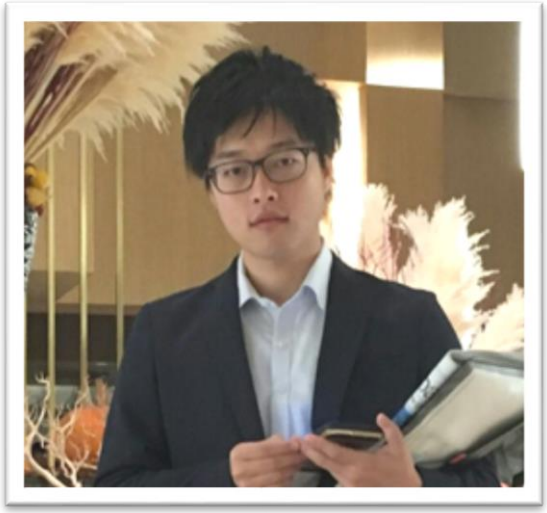
本発表では，多元的無知に基づく不支持規範(unpopular norm)の再生産メカニズムにおいて，重要な役割を担う「虚偽の罰行動(false enforcement)」の生起過程について検討しました。多元的無知とは，「集団の多くの成員が，自分自身は集団規範を受け入れていないにもかかわらず，他の成員のほとんどがその規範を受けいれていると信じている状況」を指し，望まれない社会規範や文化の維持・再生産を説明する現象だとして，多くの研究者たちの注目を集めてきました。近年，多元的無知の状況下において集団成員が本心では拒絶しているはずの規範を奨励し，逸脱する他者に罰を与える虚偽の罰行動と呼ばれる現象が報告されましたが，なぜそうした行動が引き起こされるのかは十分に理解されていませんでした。本研究では大学生の飲酒規範を題材として，虚偽の罰行動は“集団内でよい評判を維持できる”という期待に基づいて行使されるという仮説を検証しました。その結果，大学生は他の学生の飲酒に対するポジティブな態度を実際よりも過大視しており，飲酒規範からの逸脱者（=飲み会で下戸だからあまり飲んでない個人）に対する罰行動（=ビールを飲むようにはたらきかける）は，集団内での評判維持という動機づけが強く影響していることが明らかになりました。虚偽の罰行動は別の他者に観察され，多元的無知の確証となり，また規範への同調を誘発すると考えられます。本研究結果は，マイクロな個人の評判維持戦略が，意図せざる結果として不支持規範の維持・再生産というマクロな社会現象を作り出すことを示唆しています。本研究内容はグループ・ダイナミックス学会にふさわしい内容だっただけに，評価していただけたことを大変嬉しく思います。

これまでの多元的無知研究の多くは，“こんなトピックでも多元的無知が起きているよ，

こんな社会現象が多元的無知で説明できるよ”というように，新たなトピックを列挙していく拡散的なものでした。本受賞を励みとして，多元的無知によって不支持規範が維持・再生産されるメカニズムをより精緻に解明できるよう，さらに深く切り込んでいきたいと考えております。引き続き，ご指導ご鞭撻を賜りますよう，よろしくお願い申し上げます。**（執筆：宮島　健）**

＜English Session 部門＞
Wenzhen Xu・Reina Takamatsu・Chendong Ding・Syuji Uko・Anqi Hu・Jiro Takai
Relational intimacy levels and interpersonal communication styles

❀ **徐　文臻（名古屋大学大学院教育発達科学研究科）**
高松礼奈（名古屋大学大学院教育発達科学研究科）
丁　陳棟（名古屋大学大学院教育発達科学研究科）
鵜子修司（名古屋大学大学院教育発達科学研究科）
胡　安琪（名古屋大学大学院教育発達科学研究科）
高井次郎（名古屋大学大学院教育発達科学研究科）



この度は大変名誉のある賞をいただくことができ，誠に光栄と存じます。

審査員の先生方，貴重なコメントをくださいました皆様に心より感謝申し上げます。

本研究では,「アメリカ人はなんでもはっきり言うのか？日本人は誰に対しても物事を遠回しに言うか？それはなぜだろうか？」というコミュニケーション方略の文化差を文脈的な要素（親密度に対する認知）を取り入れて再検討しました。その文化差は関係流動性の観点から説明されましたが，解釈の部分は若干論理的弱みが指摘されました。今後は，行動実験のデータで結果の再現や原理の補足説明が必要と考えられます。

実は，私は長期に渡って口頭発表に対して，恐怖感を持っていました。学部生として，中国の南京大学で日本学を専攻していました。卒業論文では日本の若者のコミュニケーション方略について心理学っぽい卒業論文を書きました。日本に来てからは，鼻歌を歌いながら名古屋大学の研究生時代を楽しみ (入学試験の一週間は怯え過ぎて歌えませんでしたが), 入学後やっと兼ねて憧れを持っている心理学に身を投げるようになりました。当時は，日本語も英語も怪しくて，心理学の知識も万全ではなかったため，人前で意見を言う際には常に遠慮をしていました。

初めての転機はアメリカの学会においてのポスター発表でした。周りの学者が白熱した

議論を展開する姿を見て，「ずっと黙って立っているだけの私にはわざわざ 20 時間かけて来るほどの意味があっただろうか？とりあえず，Comfort zone から一歩踏み出そう！」とビクビクしながらも決意をしました。その意志を指導教員の高井先生にもお伝えしたところ，とても応援してくださいました。先生のおかげで，過去の三年間，海外の研究機関における数多くの研修機会を経験し，外国の研究者の方々との打ち合わせにもいつも同席することが出来ました。そのため徐々に人前でプレゼンテーションをする自信を身につけました。今回でグルダイの English Session に出席するのは 3 回目で，発表は二回目でした。このセッションはまだまだ初心者の私にとって，非常に話しやすい環境であり，国際ステージに最も近い舞台だと思います。私と同じく外国語で発表することに対する恐怖心がある若い研究者には間違いなくおすすめです。勇気を出して，一歩を踏み出しましょう。

この受賞を励みとし，より一層研究活動に邁進していく所存です。今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう，何卒よろしくお願い申し上げます。最後になりましたが，プロジェクト代表者の高井次郎先生，研究協力者のカリフォルニア州立大学の Peter. Lee 先生，および高井研究室の皆様に，この場を借りまして，感謝を申し上げます。**（執筆：徐 文臻）**

＜ポスター部門＞
河村悠太・楠見　孝
「他者の目」が利他行動を促進するとき　－社会的規範の調整効果－

❀ **河村悠太（京都大学大学院教育学研究科・日本学術振興会）**
楠見　孝（京都大学大学院教育学研究科）

このたびは，優秀学会発表賞という名誉ある賞をいただき大変光栄に存じます。御多忙の中選考してくださった先生方，関係者の皆様に心から感謝を申し上げます。

本研究は，目に似た模様の画像が利他行動を促進するという現象のメカニズムについて，実験室実験によって検討したものになります。いくつかの先行研究は，目の画像のもとで利他行動が促進される原因として，(1) 利他行動に対する良い評判の獲得期待か，(2) 規範逸脱に対する悪い評判の回避欲求のいずれかの関心が目の下で高まるためである可能性を示唆してきました。この評判期待説と悪評回避説のいずれが正しいかを検証するため，本研究では社会的規範(≒周囲が利他的に振る舞っているか否か）を操作し，目の画像の効果が変わるかを調べました。評判期待説が正しい場合，規範にかかわらず目の画像の影響が生じると考えられますが，悪評回避説に基づけば，利他的に振る舞う規範が存在するときのみ，目の画像は利他行動を増やすと考えられます。実験の結果，社会的規範が存在するときのみ，目の画像は利他

行動を促進していました。この結果は，悪評回避説を支持しており，この効果が生じるメカニズム解明に寄与すると考えています。

目の画像の効果は，2005 年に最初の論文が出てから多くの研究で追試・検討されてきました。目の画像が利他行動を促進することを示した研究もある一方で，有意な効果を検出できなかった研究も多くあり，近年では実験状況の違いを考慮せずにメタ分析を行った場合，有意な効果は見られなかったことが示されるなど，その効果の有無について今なお議論が続いています。結果が混在していることを受けて，近年では，どのような状況において効果がみられるか，すなわち調整要因に関する検討が求められています。本研究の知見はこの流れにおいても，有用であると考えています。社会的規範は目の画像の効果を調整しうる要因の一つとして，その影響を検討した研究が近年では増えています。一部の研究では規範の調整効果がみられていない研究もあるため，今後知見が積み重ねられるなかで，効果の有無や大きさについて，議論を深める必要があると考えています。

最後になりましたが，この場をお借りして，本発表に対してコメントやご質問を下さった先生方に厚く御礼申し上げます。また，日頃からご指導いただいている京都大学大学院教育学研究科教育認知心理学講座の先生方，OB/OG の方々，および院生の皆様に深く感謝いたします。（**執筆：河村悠太**）

★☆★　国際学会大会参加記　★☆★

❀　河合直樹（京都大学大学院工学研究科）

このたび，国際学会発表支援制度のご支援をいただき，2016 年 8 月 24 日から 27 日にかけてインドで開催された Annual IODA Conference に参加してまいりました。

開催地はもちろんニューデリー・・・かと思いきや，片道 26 時間を要する（!!）南インドのマイソールという都市でした。そこはかつてマイソール藩王国が栄えた地であり，荘厳な宮殿をはじめ，数々の遺跡やヒンドゥー寺院が並びます。絹織物（サリー）や白檀（サンダルウッド）の名産地でもありますので，観光やショッピングを存分に楽しむことができます。せっかくのこの機会，滞在期間を数日延ばし，僭越ながら以上すべてを堪能させていただきました。

このような素晴らしい都市で開催された本大会は，数々の刺激に満ち溢れるものでした。IODA は，International OD Association の略称です。OD（組織開発）は，組織の活性化を理論的・実践的に探究する学問分野であり，グループ・ダイナミックスの祖「クルト・レヴィン」が創始した学問分野として知られています。さて，この大会は，他の学会にはみられない大きな特徴が 3 つあります。

第一に，発表形式です。大会プログラムは，なんと，基調講演とワークショップのみで構成されています。基調講演はもちろん招待講演ですから，一般参加者に与えられた選択肢はワークショップのみといえるでしょう。参加者同士の対話を大切にする強いポリシーが，この発表形式に反映されているのです。

第二は，参加者構成です。本大会の参加者のほとんどは，実務家（ODコンサルタント）です。自身の経験に即した深い対話があちこちで展開されます。しかも，多くの方は当然のように Ph.D.をもっていますから，理論的なディスカッションもお手のものです。このように，理論と実践を絶えず行き来しながら，お互いの見識を深め合うことができるのです。

そして第三に，参加者どうしの「近さ」です。常連参加者であり今回の共同発表者でもある先生は，しばしば「同窓会」という表現を口にされますが，まさにその通りと感じます。私は，一昨年の京都大会，昨年のポートランド大会に続き 3 回目の参加になりますが，ずいぶん多くの方と親交を深めてきました。初めて会った（はずの）方に挨拶をしても，「We all know you, Naoki!」（ナオキのことならみんな知ってるよ）という言葉がさらっと返ってきて驚愕したこともありました。100 人規模の小さな学会ならではの，密度の高い交流と再会の場となっていることは，本学会の最大の魅力といってよいかもしれません。

私が主宰したワークショップは，次のようなものです。まず，これまでの OD が，「過去」の分析や「未来」の構想には関心を向けてきた一方，「今ここ」で展開されている多様なダイナミックスに十分アプローチできていないのではないか，という問題関心を立てました。そのうえで，私が東日本大震災の被災地で継続してきた書道教室ボランティアの話題を皮切りに，実際に参加者に書道を体験してもらうことを通して，書道の魅力と可能性について自由に対話を行いました。体験を取り入れたワークショップは好評をいただき，「今ここ」への接近手法としての可能性を，多くの参加者に共感していただけたように思います。惜しむらくは，直前の基調講演が長引いてしまったせいで，開催時間が本来の 90 分から 60 分へと短縮されてしまい，駆け足気味のワークショップとなってしまったことです。不測の事態に常に備える姿勢の必要性を痛感した出来事でした。

実は，会期中の 8 月 24 日は私の誕生日でした。しかも IODA 前会長の結婚記念日が私の誕生年月日とぴったり一致することが判明し，その数奇な巡りあわせを互いに祝福していましたら，当夜のウェルカムパーティーの場で，なんと参加者全員による「♪Happy Birthday」合唱というサプライズが！30 歳という節目の瞬間を，多くの知的刺激と，あたたかい心に包まれながら謳歌することができました。かけがえのない充実した学会参加をご支援くださった本支援制度関係者の皆様に，心より御礼申し上げます。まことにありがとうございました。

❀　乾　陽亮（大阪大学人間科学研究科）

この度，日本グループ・ダイナミックス学会からご支援をいただき，2016 年 10 月 1 日から 3 日の日程でイランのイスファハーンで開催された IDRiM 2016 に参加させていただきました。

渡航前は，文化や風習の違いが気になりましたが，お酒が飲めないこと，クレジットカードが使えないこと以外に不便を感じることはなく，快適に過ごすことができました。また，学会会場自体がイラン随一の歴史を誇るアバシホテルであったことや徒歩圏内に世界遺産であるイマーム広場があったので，学会終了後に中東文化を知る機会にも恵まれました。さらに，10 月がイスラムシーア派の喪月のモハラムと重なり，10 月 1 日になった途端に街中をチャドルに身を包む女性や上下を黒で統一した男性で溢れかえったことには驚きました。

さて，学会についてですが，開催都市がイスファハーンということもあって，中東諸国からの参加者が多く，欧米圏やアジア圏からの参加者は少数派でした。

防災や減災を主たるテーマとした学会でしたが，「災害」の定義が各国によって異なることを再確認いたしました。今回の国際学会では，地球温暖化や水問題といった国内の防災・減災に関する学会ではあまり見ることのない発表内容が目立ちました。私個人としては，昨年１２月に実施したネパール地震被災地でのフィールドワークをもとに発表を致しました。カトマンズや周辺地域のテント村に住む被災者へのインタビューより，レジリエンスやヴァルネラビリティの概念が曖昧なままに外部者によって使用されている現状を報告しました。発表後には，他の報告者より激励のコメントをいただき，良い刺激をいただくことができました。

今回の学会参加では，渡航中の生活全般を通じていかに自分が限られた見識の中で生活しているかが分かりました。書籍による研鑽は当然として，実際に自分の足で知識を得ていくことの重要さを改めて実感いたしました。

末筆ではございますが，今回の参加にあたってご支援を賜わりました日本グループ・ダイナミックス学会の皆様，審査をしていただきました先生をはじめとする関係された皆様に厚く御礼申し上げます。

★☆★　現場とグルダイ　教育界編　★☆★

色褪せることのない研究

黒川雅幸（愛知教育大学教育学部）

「支持的風土の学級づくり，人間関係の形成，温かな雰囲気の学級経営」。名古屋市内の小学校から現職教員研修を依頼された時のテーマとして頂いたものである。今回の研修では，4 人グループに分かれてもらい，グループで協力して 1 つの課題を解決するアクティビティを実施した。本活動は，まさにグループ・ダイナミックス研究の得意とする領域であった。

教育とグルダイの関係は大変深い。このことは，グルダイから発行されている機関誌『実験社会心理学研究』の前身が『教育・社会心理学研究』であったことからも容易に想像できる。今から半世紀以上前に発行された『教育・社会心理学研究』の第 1 巻第 1 号のタイトルを改めて見てみると，牛島義友先生著の「日本と西欧における態度形成の方向」，三隅二不二先生・中野繁喜先生著の「学級雰囲気に関するグループ・ダイナミックスの研究（第 II 報告)―所謂，専制的，民主的，自由放任的指導タイプの効果に関する Cross-Cultural Study―」，原岡一馬先生著の「態度変容に及ぼす態度の方向，強度及び集団関連度の影響」，…と続く。

学校現場から研修等で要望があるテーマは，『教育・社会心理学研究』に掲載されている古典的な研究に関するものが少なくない。リーダーシップであるとか，学級集団内の対人関係のダイナミックスであるとか，学級雰囲気であるとか…。研究が発表されてから半世紀経った今でも，当時の研究成果は大いに存在感を発揮している。そもそも研究で得られた知見には，普遍的であることが求められるものなので，古典的な研究であっても役立っているのは当然のことなのかもしれない。だが，古典的な研究であっても，学校現場ほど役立っているところはないのではないかと感じる。それは，学校が時代によって変化しにくい環境であるからなのだと思う。学校へ行くと，「あぁ小学校ってこんなところだったなぁ。」と母校でもないのに，廊下や教室の掲示物，子どもたちの活動，教師の姿に懐かしさのようなものを感じることもある。

それでも，社会の変化にともなって，教育現場にも新しい研究知見が必要になることもある。例えば，私がここ最近取り組んでいるネットいじめの研究もその 1 つであろう。

平成 28 年度の全国学力・学習状況調査結果によれば（国立教育政策研究所, 2016)，小学校 6 年生では 61.3%，中学校 3 年生では 81.5%の子どもが携帯電話・スマートフォンを所有している。子どもたちにとってインターネットがより身近な存在になり，SNS でやりとりをしたり，調べものをしたり，オンラインゲームをしたり，動画や音楽を視聴したり，買い物をしたりするなど，現実的な世界に加えて，新たな生活空間ができたかような状態にな

っている。半世紀前には，子どものインターネットの世界など，きっと想像もできなかったことであろう。

色褪せることのない研究知見を参考にさせて頂きながら，「現代的な部分」については，責任と自負をもって今後も研究活動に邁進していきたい。

★☆★　事務局からのお知らせ　★☆★

【　研究の国際化支援制度（英文校閲補助）について　】

この制度は，本学会会員の研究の国際化を支援するため，会員が自らの研究成果を英文誌に投稿する際の英文校閲代金の一部を補助するものです。昨年度は 5 名の会員への補助を行いました。今年度も引き続き募集しています。年齢の制限はありませんし，複数の論文校閲費を合算して申請できます。また，補助対象となった会員の方々についても，年度を超えれば改めて申請することが可能です。皆さま，奮って申請してください。詳細については学会ホームページをご参照いただければ幸いです。よろしくお願いいたします。
(学会 HP: http://www.groupdynamics.gr.jp/support_international.html)

【　国際学会発表支援制度について　】

今年度より，日本国外で開催される国際学会での会員の発表支援を行う形に改正いたしました。アジア社会心理学会だけではなく，他の国際学会での発表に対する支援を毎年度実施いたします。今年度は 2 名の会員に対して支援を行いました。申請締め切りの時点で発表予定のものだけではなく，すでに発表したものも支援対象となります。また，他学会の支援制度との重複受給も可能です。来年度の締め切りは 7 月 31 日（月）の予定です。詳細については学会ホームページをご参照いただければ幸いです。皆さまからの応募をお待ちしております。
(学会 HP: http://www.groupdynamics.gr.jp/support.html)

【　実験社会心理学研究　掲載予定論文　】

■　2016 年度 56 巻 2 号（2017 年 2 月発行予定）

原著論文

田垣正晋
　先進事例の追跡調査から見る障害者施策推進に関する住民会議の変容

新井田恵美・堀毛一也
　評判に対するセンシティビティが男性の短期配偶志向に及ぼす影響

宮前良平・渥美公秀
　被災写真返却活動における第 2 の喪失についての実践研究

☆早期公開済み論文は下記サイトで閲覧できます。
https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jjesp/-char/ja/　（学会誌トップページ）

【　「実験社会心理学研究」の特集テーマ募集　】

「実験社会心理学研究」では，グループ・ダイナミックスや社会心理学に関連する特集を掲載します。特集は，特定のテーマのもとに論文３編程度により構成されます。特集についての企画をお持ちの会員は，企画の趣旨，特集論文の概要等をまとめた企画書（A4 版 1-2 枚程度）を編集委員長に提出して下さい。企画の採択については，常任編集委員会で審議のうえ決定します。

特集論文の審査手順などに関する詳細は，学会ホームページ
(http://www.groupdynamics.gr.jp/feature.html)をご参照ください。

なお「実験社会心理学研究」は，特集の掲載によって一般投稿論文の掲載に大幅な遅滞が生じないことを重視しています。企画を提出される方は，この点をご承知おきください。

【　次年度大会について　】

2017 年度大会は，唐沢かおり委員長のもと，東京大学（本郷キャンパス）にて 9 月 30 日（土），10 日 1 日（日）の予定で開催されます。多くの会員の方の参加をお待ちしております。

★☆★　グルダイ学会関係連絡先　★☆★

本学会では，事務支局を中西印刷株式会社に開設しております。入退会，住所・所属等変更，会費納入，機関誌等の未着・メールマガジンなどのメール配信先の登録・変更・停止等の連絡先は，事務支局である中西印刷株式会社までご連絡ください。

また，論文投稿先・審査書類送付先も中西印刷株式会社となっております。詳細は下記をご覧ください。各種お問い合わせの具体的な連絡先は以下の通りです。

事務支局【入退会，住所・所属等変更，その他お問い合わせ先】

日本グループ・ダイナミックス学会事務支局
〒602-8048　京都市上京区下立売通小川東入る
中西印刷（株）学会フォーラム内
電話：075-415-3661
FAX：075-415-3662
E-mail：jgda@nacos.com

学会運営・対外業務関連

日本グループ・ダイナミックス学会本部事務局
〒463-8521　名古屋市守山区大森 2-1723
金城学院大学 人間科学部 多元心理学科　北折充隆研究室
電話：052-798-0180(代表)
E-mail：sec-general@groupdynamics.gr.jp

投稿論文・学会誌編集関連

【論文投稿先・審査書類送付先】
日本グループ・ダイナミックス学会　編集事務局
〒602-8048　京都市上京区下立売通小川東入る
中西印刷（株）営業部編集校正課内
電話：075-441-3155
FAX：075-417-2050
E-mail：jjesp-hen@groupdynamics.gr.jp
【編集委員長】
今川民雄
〒004-8631　北海道札幌市厚別区大谷地西 2-3-1 北星学園大学社会福祉学部
E-mail： imagawa@hokusei.ac.jp

広報関連

【ぐるだいニュースの編集・記事の投稿，メールマガジンへのニュース記事投稿，新刊案内や研究会案内等のニュース記事，書評，公募情報など】

〒811-4192　福岡県宗像市赤間文教町 1-1
福岡教育大学教育学部　幼児教育講座　植村善太郎研究室
E-mail：office@groupdynamics.gr.jp までお送りください。

また，マガジンに関するご希望・お問い合わせ等も，同アドレスまでお送りください。

【編集後記】

今年も予測していなかったことが次々と起こる年でした。そうした出来事の意味を十分に振り返る余裕もなく、「あ～」といっているうちに年末を迎えた気がします。年末は、今年の様々な出来事について心の中で整理して、新年を迎えたいと考えています（心の大掃除？）。会員の皆様も、どうぞよいお年をお迎えください。（編集子）